
バカと少女と召喚獣

亜花寝子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカと少女と召喚獣

【Nコード】

N2801X

【作者名】

亜花寝子

【あらすじ】

科学とオカルトと偶然によって完成された「試験召喚システム」を導入した文月学園。
Fクラスに入ることになった関根^{せきね} 朔夜^{さくや}は、幼馴染である吉井明久や坂本雄二、Fクラスの仲間達と打倒Aクラスと奮闘するのだった！

プロローグ（前書き）

始めまして、あかね亜花寝子です

初投稿であります！

グダグダですがご了承ください（苦笑）

それでは、最後までよろしくお願いします

プロローグ

私がここ文月学園に来てから2度目の春が訪れた。

桜が満開に咲き誇り、これから学園生活を始める新入生を歓迎しているようだ。

見とれるような美しさであったが私はこれからの学園生活とクラスについて頭がいっぱいだった。

「関根、遅刻だぞ！」

私が校門を通り校舎に入ろうとすると呼び止められた。

「あっ、鉄人先生。おはようございます」

「鉄人じゃなく西村先生と呼べといつもいっているだろう？」

この、黒い素肌にスーツ姿の人物こそ、文月学園、生徒指導担当の西村教諭である。

趣味はトリアスロンと、いかにもスポーツができそうな先生だ。

「ほら、受け取れ、これが試験の結果だ。」

てつじ・・・西村先生から一つの封筒を受け渡された。

「お前ほどの実力があればAクラスなど簡単に入れただろうに」

「ということはAクラスじゃなかったってことですね・・・残念です。」

Bクラスかぁ・・・それにしてもなかなか封筒があかないんだけど！

「一言言わせてもらってもいいか？」

「別にかまいませんよ、減るもんじゃないですし」

ようやく封筒の中の紙を取り出し、開いた、そこに書いてあったは・・・

「次からは名前くらいちゃんと書け」

関根 朔夜 ” Fクラス”

「絶対いやああああ!!!」

悲鳴の叫びが校舎全体にこだました。

ここから私のFクラスでの学園生活が始まっていく・・・。

プロローグ（後書き）

まだまだ冒頭ですけど、いかがでしょうか？
楽しんで読んでいただけてたら嬉しいかぎりです
感想やご意見がありましたらお待ちしております

第一問（前書き）

読んでいただく人がいて嬉しいです
今回も楽しんでいただければ幸いです

第一問

「はぁ……、Fクラスか……、それも名前を書き忘れてっぺ！」

愚痴をこぼしながら重い足を引きずりながら自分に割り振られたクラスに歩き出した。

「これからは問題を解く前に名前を書こう、うん……」
と、一人で決心しているとバカでかい教室が見えてきた。

「うわあ、ここが名前を書いてたら私のクラスだったAクラスかぁ……」

Aクラスの前で足を止め、大きな窓から中を覗いてみると、スーツを着こなし、知的女性の教師が立っていた。その後には、黒板ではなく壁全体を覆うほどの大きさプラズマディスプレイに「高橋 洋子」と表示されていた。

「皆さん進級おめでとうございます。私はこの二年A組の担任、高橋洋子です。よろしくお願いします。」

あのプラズマディスプレイ欲しい……、などと考えていると聞きなれた声が聞こえてきた。

「うわあ、システムディスクにリクライニングシート、ノートパソコン支給か、いいなあ！Aクラス」

ふと隣を見ると幼馴染が私と同じように窓からAクラスをみて羨ましそうに声をあげていた。

「アキくん？どうしたのこんなところで？」
「うわっ!?!……朔夜？」

まったく……、幼馴染の顔まで忘れるほどのバカだったなんて……

「ねえ、今さらっつとひどいこと言ったよね!?!」
「えっ?なにが？」

もしかして心の声が読まれてる!?!それともついつい本音を言っ

ちやった!?

「また罵倒された気が・・・、まあ、それはおいといて、朔夜はAクラスでしょ? クラスの中に入らないの?」

「ん? 私ね、ちよつとしたミスでAクラスに入れなかったんだよ、名前を書き忘れるというちよつとしたミスをね」

「バカだつ!」

「あ・・・アキくんにはバカつて言われた・・・」

アキくんにはバカつて言われるなんて・・・、屈辱だよ!

「で、どこのクラスになったの? Bクラス?」

「アキくんにはバカつて言われた・・・」

「ねえ! まだ言ってるの!」?

だつて2年を代表するバカにバカつていわれたんだよ! ? この私が!

「で、結局どこのクラスになったの? 修羅のさ」それ以上言ったら殺すよ? (殺気)「ごめんなさいい!」

すぐさま土下座を始めるアキくん。

「そのあだ名は言わない約束だよね?」

そう、昔、私は修羅の朔夜と呼ばれていた頃もあったが、ある時を境にその名は消えた・・・、そうある時を境にして

「だつて、昔、そう呼んでくれて言つたのは朔夜のほうだよ?」

「昔は昔、今は今なの!」

そう、生まれ変わろうと思つた日から。

「つて、朔夜、そんなことより早く行かないと遅刻しちゃうよ?」

「そんなことじゃないの私にとつてわ! それもアキくん、もう十分遅刻してるから!」

「ええー、つてそうだったね」

まったくもう・・・と私はため息をつき、アキくんの肩を叩く

「ほらつ、早く行こうよ、アキくん!」

私は自分のクラスに向かつて走り始めた、その後を追つようにアキくんも走り出し

「結局、朔夜つてクラスなんなのさ!」

「いや、名前を書き忘れたんだからテストの点数が0でしょう！」
「そっかあ、じゃあFクラスだね・・・えっ・・・Fクラス？」
「そうだよ、早く行くよ、アキくん！どうせFクラスでしょ」
「どうせってなにさあ！まあ・・・Fクラスだけどさ！」
あはは、と私は笑いながら自分のクラスへと駆けていく。
「ま、まっつてよ朔夜ー！」

第一問（後書き）

修羅と呼ばれていた朔夜、そしてある時を境に……。

朔夜にいつたいなにがあったのか……。

まあ、この話はまたいつか書きたいと思っております

自分で書いておいて言うのなんだけどグダグダだあゝ（苦笑）

お楽しみいただけていたら幸いです、感想などお待ちしております

第二問（前書き）

久しぶりに部活やったら疲れたよお・・・

第二問

「もう、アキくんのせいで遅刻しちゃったじゃん！」

「僕だけのせいだけじゃないよね!？」

なにを言う、アキくんがいなければ話し合わなかったもん!

「てか、初日から遅刻しちゃって皆に悪い印象を持たれないかな？」

「大丈夫じゃない?早く入ってよアキくん！」

考えすぎか、といいながらアキくんは扉を開けた。

「すみません、ちよつと送れちゃいましたっ」

「早く座れウジ虫野郎！」

うわあ、悪い印象持たれたな、絶対に!

「……雄二、なにやってんの？」

「……ん?雄二って……、まさかっ？」

「先生が遅れているらしいから、代わりに教壇に上がってみた」

ということ、坂本がクラス代表かあ……、嫌だなあ……振り

分け試験の日になんで名前書き忘れたんだろう私!

「先生の代わりって、雄二が?なんで？」

「一応このク「代表だからだよ、アキくん!」……なぜここに

いる？」

そう説明しながらクラスの中に入っていく私を教壇の上から見下ろしている坂本。

「遅れてしまつてすみませんでしたあ」

「俺の質問は無視か?!？」

クラスの中に完全に入った瞬間、Fクラスの男子が騒ぎ始めた。

「じよ……女子が来たああ!!！」

「なにあの子?すっげー可愛いじゃん！」

Fクラスって男子ばかりだね……、うん。

「みんなよろしくね (ニコツ)」

「……ひゃっほ……!!！」

な・・・なんなのこの歓喜の声わ！気持ち悪い！

「・・・どつかで見たことあるんじゃないかな。」

どこからか何かを呟く声が聞こえた気がする・・・まっ、気のせいだよな。

「おいっ！だから俺の質問に答えろ！」

えっ？なんか質問されてたっけ私？

「えっ？なにが？みたいな顔してるんじゃないやねえよ！」

あれ、顔にでてたかなあ？

「ちよつと、凡ミスしちゃってさあゝ、よろしくね、悪鬼羅刹」

「・・・ほお、凡ミスでお前がFクラスだと？きちんと説明してみな？」

にやにやしなからそう言ってくる、絶対わかかって言わせようとしやがってるな・・・ムカつく！あのにやにやした顔がムカつく！あの顔がホントムカつく！

「おいっ！どんだけ罵倒すれば気が済むんだよ！」

・・・アキくんといい、坂本といい、なんで心が読めるのか不思議でたまらないよ・・・、そう思っていると後ろから声が聞こえてきた。

「えーと、ちよつと通してもらえますかね？」

後ろには寝癖のついた髪によれよれのシャツを着て、冴えないおじさんがたっていた。

「それと席についてもらえますか？HRを始めますので」

ああ・・・このクラスの担任かあゝ

「はい、わかりました」

「うーっす」

「了解です」

私とアキくんと坂本はそれぞれ返事をして、適当な席(?)に座る。

「えー、おはようございます。二年F組担任の福原慎ふくはらしんです。よろしく願います」

福原先生が後ろにある薄汚れた黒板に名前を書こうとしてやめた。

えっ？もしかしてこのクラスってチョークすらまともにな置かれてないわけ！？

「皆さん全員に卓袱台と座布団は至急されていますか？不備があれば申し出てください」

Aクラスとは天と地の違いなんだね！うん！

「せんせー、俺の座布団に綿がほとんど入ってないです！」

「あー、はい。我慢してください」

「先生、俺の卓袱台の脚が折れています」

「木工ボンドが支給されていますので、後で自分で直してください」

「センセ、窓が割れていて風邪が寒いんですけど」

「わかりました。ビニール袋とセロハンテープの支給を真性しておきましょう」

ダメだ、私ここで1年間暮らす自信がないよお！なにこの教室！？
廃屋かなにかかなあ！

「必要なものがあれば極力自分で料立つるようにしてください」
教室全体からかび臭い独特の匂いが漂う、きつと古い畳のせいじゃないかな。

「では、自己紹介でも始めましょうか。そうですね、廊下側の人からお願いします」

先生の指名を受け、廊下側の生徒のひとりが立ち上がった、．．あれ、どこかでみたことあるような？

「木下秀吉じゃ。演劇部に所属してある」

．．．木下．．．秀吉??

「というわけじゃ、一年間よろしくたのむぞい」

どこかで見たことあるような男の子なんだけどなあ．．．、ていうか、Fクラスの男子（坂本を除く）みんながあの子のことを女子を見るような目でみてるよね．．．。

「．．．．．土屋康太」

ん〜、小柄な子だなあ〜、それにしても口数少ないよね．．．、もう少ししゃべればいいのに、それにしてもこのクラス女子が少ない

よね、てか、私以外に女子いるの・・・？といろいろな考えをしていると

「です。海外育ちで日本語は会話ができるけど読み書きが苦手です」

あっ、女子の声だ！よかった、私以外に女子がいて」

「趣味は吉井明久を殴ることです」

それもいい趣味をしているね！あの子とは気が合いそうだなあ、後で話しかけてみようっと。まあ、隣でアキくんが泣きそうな顔をしているのは気にしない、気にしない

「はろはろー」

笑顔でアキくんに手を振ってるなあ」

「・・・あう。島田さん」

ふくん・・・、あの子の名前は島田さんっていうんだあ・・・覚えておかなきゃ

「です。よろしく」

ふあ、・・・、だんだんと飽きてきたなあ、みんな普通でつまらないからなあ」

「コホン。えーっと、吉井明久です」

おっ、きたなアキくん！アキくんなら面白い自己紹介のはずだ！期待のまなざしでみてみるとアキくんがこつちを見て固目をつぶった、どんな面白いことをいうんだろうアキくんわ・・・

「気軽に『ダーリン』って呼んで下さいね」

「・・・ダーアーリーーン！！」「」

ぷはっ！w気軽にダーリンって呼んでくださいって、それもFクラスのひとつだがダーリンって呼び始めるとか、このクラスでできるなっ！それもアキくん不愉快そうな顔してるよ、自分で呼んでくださいっていつておきながら！w

「失礼。忘れて下さい。とにかくよろしくお願い致します」

アキくんが席に着くと私はすかさず手でグッジョブとするとアキくんが顔をわすそうにして苦笑いをしてくる、まあ、あんな野太い

声で大合唱されたら仕方ないよねw

「です、一年間よろしくお願いします」

自己紹介は進んでいき、そろそろ私の番になろうとしていたとき、不意に教室のドアが開き息を切らせて胸に手をあてている女子高生が現れた・・・あの胸、髪の毛・・・まさか!?

「あの、遅れて、すいま、せん・・・」

『えっ?』

教室全体から驚いた声があがる、そりゃそうでしょ、普通驚くよね! 「丁度よかったです。今自己紹介をしているところなので姫路さんもお願いします」

「は、はい!あの、姫路瑞樹といいます。よろしくお願いします・・・」

「やっぱり、みーちゃんじゃん!それにしても学年上位のみーちゃんがこんなFクラスに?」

「はいっ!質問です!なんでここにいますか?」

まあ、普通そんな質問するよね、私のときはそんな質問しなかったくせに・・・まあ、仕方ないか」

「そ、その・・・振り分け試験の最中、高熱を出してしまいました・・・」

なるほど、途中退席するとテストの点数が0点扱いされちゃうんだよねたしか

「で、ではっ一年間よろしくお願いしますっ!」

うん・・・やっぱりみーちゃんは可愛いなあ」

「き、緊張しましたあ・・・」

席につくや否や、安堵の息をついて卓袱台に突っ伏すみーちゃん、そこにアキくんが話しかけようとしている、がっ、坂本が声をかぶせるようにみーちゃんに声をかける、あれだな、どうせアキくんのいやがらせだろう。

「ところで、姫路の体調は未だに悪いのか?」

「あ、それはぼ「みーちゃん!久しぶり」って朔夜!?朔夜も

僕の邪魔をするの!？」
ふっ・・・もちろん!!

第二問（後書き）

・・・すごいなくなっちゃったような
どこで切っていいかわからずつついついここまでw
それも中途半端なところで切ってしまった（苦笑）
感想などお待ちしております！

第三問（前書き）

ちよいと風邪気味でして、見直してみたら誤字が多すぎたよ（苦笑）

第三問

「えっ？さ・・・さくやちゃん!？」

「なんだよみーちゃん、親友の顔も忘れちゃったの？」

アキくんといい、みーちゃんといい、なんでそんなにビックリするかなあ・・・

「ど、どうしてさくやちゃんがここに？さくやちゃんだったらAクラス確定でしょうに・・・」

「うーん、それがさあ、名前書き忘れちゃってさあ」

「そ、そうなんですか、ちゃんと名前くらい書きましょうね？」

「そうするよ」

「で!？僕は無視なの!？」

「あ・・・明久君!？」

ちっ・・・、せっかくみーちゃんと話してたのになんで入ってくるんだよアキくん!

「姫路。明久がブサイクですまん」

さ、さすがに言いすぎじゃない坂本・・・

「そ、そんな！目もパツチリしてるし、顔のラインも細くて綺麗だし、全然ブサイクなんかじゃないですよ！その、むしろ・・・」

ああ、そういえば、みーちゃんって・・・ふふっ

「そう言われると、確かに見てくれは悪くない顔をしているかもしれないな。俺の知人にも明久に興味を持っている奴がいたような気もするし」

「え？それは誰「そ、それって誰なんですか!？」」

アキくんの言葉を遮るように聞くみーちゃん、まあ、そうだよな、なんせみーちゃんは・・・ふっふっ

「確か、久保」

久保？久保さんなんていたけかな・・・？

「利光だったけかな」

ぶつ W久保利光つてたしか学年次席（ ）だったようなW

「・・・・・・・・・・」

「アキくん、そんな声を殺してさめざめと泣かないの」

アキくんの頭を撫でてあげるとアキくんは少しおちついたようだ

「あつ・・・さくやちゃんずるいです・・・」

みーちゃんが私にしか聞こえないくらいの小声でそんなことを言うてきた、みーちゃんもすればいいのになあ〜って無理か

「半分は冗談だ、安心しろ」

「え？残りの半分は？」

「ところで姫路。体は大丈夫なのか？」

「ずるい・・・あ、はい？体はもうすっかり平気です」

「ねえ雄二！残りの半分は!?!」

アキくん必死だなあ〜、まあ、同姓からの好意だからね〜、てか、声大きすぎ

「はいはい、その人たち、静かにしてくださいね」

ほら、そのせいで先生に教卓を叩いて注意されちゃったじゃない！

「あ、すいませ」

バキィツ バラバラバラ

先生が叩いた教卓がゴミ屑と化した、どこまでぼろかったんだろう。

・

「え〜・・・替えを用意してきます。少し待っててください」

先生が気まずそうに告げて急ぎ足で教室をでていった。

「・・・雄二ちよつといい？」

「ん？なんだ？」

「ここじゃ話しにくいから、廊下で」

「別に構わんが」

あれ、どうかしたのだろうかアキくんと坂本は、廊下でなにか話しか合ってるみたいだけど・・・まさか、アキくんが坂本に愛の告白！？Wまあ、違うだろうけど面白そうなことにかわりないし行こうかな

「みーちゃん、ちょっと廊下行つてくるね？」

「えっ？はい。わかりました」

静かに廊下にでると、アキくんが真剣な表情で坂本に話をしていた。
「まさか本当に愛の告白！？」

「折角二年生になつたんだし『試召戦争』をやってみない？それも
Aクラス相手に」

「試召戦争・・・？ああ、二年生からできるクラス対抗の戦争だっけ？」

「・・・何が目的だ」

「いやだつてあまりに酷い設備だから」

「まったく勉強に興味のないお前が、今更勉強設備なんかのために
戦争を起こすなんて、そんなことありえないだろう」

「そ、そんなことないよ興味があればこんな学校にくるわけ

」

「嘘をつくな、お前がこの学校を選んだのは『試験校だからこその
学費の安さ』が理由だろ？」

「おお、さすが頭の回りが速い坂本だね、どんどんアキくんが追い
詰められていくよ」

「あー、えーっと、それは、その・・・」

「おっ、もうアキくんは良い言い訳が見当たらないみただね」

「・・・姫路の為、か？」

「ど、どうしてそれを！？」

「そうか、みーちゃんの為にアキくんが戦争を起こそうとしてるな
んで、私感動だよ」

「つて、さ・・・朔夜！？い、いつからそこに！？」

「えっ、最初から？坂本は気づいてたばいけど」

「ちよくちよくこつちを見てきてたからなあ」

「まあ、気づいてたがな、それにしても明久はカマをかけるとすぐ
に引つかかる」

「ホントだよな、なんでこう簡単にカマにかかるんだろうね」

「は・・・ハメられた！」

ハメラれたって、勝手にハマっただけじゃw

「まあ、俺自身もAクラス相手に試召戦争をやるうと思っていただけだ」

あれ？坂本もやるうと思っていたの・・・どうしてだろう、坂本も設備なんて興味なさそうなのに・・・

「え？どうして？雄二だつて全然勉強してないよね？」

「世の中学力が全てじゃないって、そんな証明したくてな」

「ふん、世の中全てが学力じゃないねえ」

「・・・やめるその目は、気色悪い」

なっ！？可愛い可愛い少女にたいして貴職悪いなんて失礼な！

「どういうこと??？」

「アキくんはわからなくていいんだよ！」

そう、私は坂本の過去を知っているから分かるだけだけど

「まあ、Aクラスに勝つ作戦も思いついたしな　おっと、

先生が戻ってきた。教室に入るぞ」

「あ、うん」

「後でその作戦とやらをちゃんと話しなさいよね！」

ああ、言われなくてもと言いつつ、坂本は教室に戻っていく

「アキくん、みーちゃんのために頑張るからね！」

みーちゃんは比較的体が弱いからFクラスの設備じゃ体を壊すだ

ろうと思つてのアキくんの優しさだと思つからね

「えっ、朔夜も手伝ってくれるの？けど、朔夜勉強はあんまりやる

気ないんじゃない？」

「いいの、そういう優しいアキくんを手伝いたくなつちやつたんだ

よ　それに私の能力を知らないわけじゃないでしょう？」

そう、私の能力・・・、それは”絶対記憶能力”

「うん・・・知ってるけど、テストとかあんまりできてるイメージ

ないんだけど？」

「アキくんに言われたくないよ！まったく・・・初めてのテストの日の順位を忘れたんだね・・・まあ、Fクラスのみみんなも忘れてた

「おぬし、大丈夫かろう？」

手を差伸べてくる人がいた、その手に私は捕まり

「ありがとうね……って秀吉くん……？」

「ん？どうしたのじゃ？」「ボンツ」って、おぬし、大丈夫かろう？
異常に顔が赤いがのう？」

「だ、ただ、大丈夫だから」

そういうと私はすぐさま手を離し、席に着いた、そこにみーちゃんが
が耳元で小さな声でこういつてきた

「さくやちゃん、秀吉くんのことが好きなんですか？」

「そ、そんなことないよ！」

「ふ〜ん、けどお顔真っ赤ですよ？」

「うっ……、そんなに赤いかな……？」

「さくやちゃん、その反応からすると秀吉くんのことが好きみたい
ですね」

「うう……、内緒だよ？」

わかってます、といつてみーちゃんは前を向き始めた、そう、秀吉
くん、そう木下秀吉あの日、私の日常を大きく変えてくれた、私は
その日からあなたのことばかりずっと思っていた……。

第三問（後書き）

やばい、どの方向に進んでいくんだこの小説わ！（苦笑）
感想などお待ちしております

第四問（前書き）

完璧風邪をひいてしまった亜花寝子です（苦笑）
父親にpcを止められないうちに更新するんだい！！

第四問

「　　です、よろしく願います」

順調に自己紹介も進んでいき、最後に残ったのは・・・

「坂本君、キミが自己紹介最後の一人ですよ」

「了解」

先生に呼ばれ、このFクラスの代表、坂本が教壇に立つ、さて、坂本はどんなことを言うのか楽しみだね」

「Fクラス代表の坂本雄二だ。俺のことは代表でも坂本でも、好きなように呼んでくれ」

好きなように・・・？だったら

「よろしくね」 ”霧島”雄二”

「さて、皆に一つ聞きたい」

あれ？無視かな？それとも聞こえてないのかな？

「 ”霧島”雄二、おい、 ”霧島”雄二くん？」

「表に出やがれ！朔夜！！」

「望むところだよ！」

「……………！！（ガンのくれ合い）」

「坂本君、関根さん、やめなさい。坂本君は自己紹介の続きですよ」

ふん、先生が止めるのなら仕方がないな・・・

「朔夜、霧島ってどういうこと？」

ふと、アキくんが私に聞いてきた、あれ？アキくんは知らないのか？

「それはね、きりし」それ以上言うと昔の通り名をここで言うぞ

？…………アキくん、忘れて」

えっ！？という顔をしているアキくん、もう修羅なんて呼ばれたくないんだよ、それも秀吉くんがいるから余計に

「皆に一つ聞きたいことがある」

そう言ったあときりし・・・もとい、坂本は教室を見渡す

かび臭い教室

古く汚れた座布団

薄汚れた卓袱台

「設備に不満はないか？」

「「「大ありじゃあつ！」「」」

二年Fクラスの魂の叫びが教室全体にこだました

「だろっ？俺だつてこの現状は大いに不満だ。代表として問題意識を抱いている」

「そつだそつだ！」

「いくら学費が安いからと言って。この設備はあんまりだ！改善を要求する！」

「そもそもAクラスだつて同じ学費だろ？あまりに差がひどすぎる！」

次々と不満の声飛び交う、まあ、Aクラスはすごかったよね……

・名前書いときゃよかったよホント

「そこで代表としての提案なんだが」

おっ、坂本は引くつもりだね……戦争の

「FクラスはAクラスに『試験召喚戦争』を仕掛けようと思う」

坂本、いや、Fクラス代表は戦争の引き金を引いたのだった。

「勝てるわけがない」

「これ以上設備を落とされるなんて嫌だ」

「姫路さんがいたら何もいらぬ」

「俺も関根さんがいるのなら何も望まない」

「だれ？私とみーちゃんにラブコールを送る人は！みーちゃんはわかるけど、なんで私にまで！？」

「そんなことはない。必ず勝てる。いや、俺が勝たせてみせる」

たしかに、普通ならFクラスがAクラスに勝てるはずがない

『何を馬鹿なことを』

『できるわけないだろう』

『何の根拠があつてそんなことを』

だがこのFクラスは一味違う

「根拠ならあるさ。このクラスんみは試験召喚戦争で勝つことのできる要素が揃っている」

なんせ、あの坂本が勝てるというくらいだからね

「それを今から説明してやる」

根拠があるつて顔をしているFクラスに坂本が説明を始めた

「おい、康太。畳に顔をつけて姫路のスカートを覗いてないで前にこい」

「………!!!(ブンブン)」

「は、はわっ」

小柄な子は必死になって顔と手を左右に振り否定のポーズを取る、ど……堂々とみーちゃんのスカートの中をみるなんて、やるね

「土屋康太。こいつがあ有名な寡黙なる性識者だ」
ムツリーニ

「………!!!(ブンブン)」

ムツリーニ!?あの子が!?土屋康太つて名前じゃわからなかったけどムツリーニという名はこの学園じゃ有名だ!

『ムツリーニだと……?』

『馬鹿んs、ヤツがそうだといいのか……?』

『だが見る。あそこまで明らかな覗きの証拠を未だに隠そうとしているぞ……』

『ああ。ムツツリに恥じない姿だ……』

あんな小柄な子がムツツリーニなんて……

「姫路のことは説明する必要もないだろう。皆だつてその力はよく知っているはずだ」

「えっ?わ、私ですか?」

「ああ。ウチの主戦力だ。期待している」
そりゃそうだろう、Aクラスで学年主席に匹敵するほどの実力者だからね」

「そうだ。俺たちには姫路さんがいるんだった」

「彼女ならAクラスにも引けをとらない」

「ああ。彼女さえいれば何もいらぬいな」

ねえ、さつきからみーちゃんにラブコールを送り続けてる人はだれ！？

「木下秀吉だっている」

えっ？秀吉くんも？

「おお・・・！」

「ああ。アイツ確か、木下優子の・・・」

「たしか演劇部のホープだろ？」

へへ、秀吉くんが優子ちゃんの弟で、演劇部のホープなんだ」

「当然俺も全力を尽くす」

「確かになんだかやってくれそうな奴だ」

「坂本って、小学生の頃は神童とか呼ばれていなかったか？」

「それじゃあ、振り分け試験のときは姫持参と同じく体調不良だったのか」

「実力はAクラスレベルが二人もいるってことだよな！」

うっ、ひどいよねみんな！そりゃ確かに私は始めてのテストしか名前を残さなかったとはいえ・・・忘れられるものなんだね

「いや、実力がAクラスなのはもう一人いる」

みんなが驚いたような顔をしている

「おい、朔夜、お前もこっちに来い！」

「やれやれ、ようやく呼ばれたよ私・・・、一番最初に呼んで欲しかったな」

よっと、私は席を立つと教壇のほうに向かっていく

「おい、あの子もAクラス並の実力者だつてよ」

「あんな可愛い子までもAクラスの実力者だということのか」

か、可愛いだなんて・・・／＼

「関根朔夜、皆も聞いたことがあるはずだ」

みんなきよとんとした顔をしている・・・、ちくしょー！一人くらい覚えててくれてもいいじゃないの！

「・・・ふむ、知らんのか？こいつは・・・始めてのテストで姫路に2000点以上の差をつけて一位をとったやつだ」

「な・・・なんだって!？」

「あの初めてのテストで一位をとったやつだと!？」

「へっへん！皆もようやく思い出したようね！

「なんかAクラスに勝てる気がしてきたぞ!」

「やれる・・・俺らならやれるぞ!」

「それに吉井明久だっている」

・・・シーン

「ちよつと雄二!どうしてそこで僕の名前の呼ぶのさ!まったくそんな必要ないよね!」

「誰だよ、吉井明久って」

「聞いたことないぞ」

「ホラ!折角上がりかけてた士気に翳りが見えてるし!僕は雄二たちとは違って普通の人間なんだから、普通の扱いを

て、なんで雄二も朔夜も僕を睨むの?士気が下がったのは僕のせいじゃないでしょう!」

はあ・・・、折角いい感じだったのにアキくんのせいだ・・・

「朔夜!なにこいつ使えないわ、みたいな顔してるのさ!」

ば・・・ばかな!?顔にでてたの!?

「そうか。知らないようなら教えてやる」

あつ、坂本あのことを言う気なんだ、まあ、私は関係ないしね

「こいつの肩書きは”観察処分者”だ」

第四問（後書き）

うう・・・父親に怒られたよ

更新できなくなるかもしれないんで楽しみにしててくれる人

ごめんなさい（土下座）

第五問（前書き）

いやあ、風邪治って熱が引いたと思ったら試験一週間まえでパソコン禁止になり、ようやくパソコンを触れたよお・・・

第五問

『・・・それって、バカの代名詞じゃなかったっけ？』

クラスの誰かがアキくんが一番傷つく言葉を口にする

「ち、違うよ、ちょっとお茶目な十六歳につけられる愛称で」

「そうだ。バカの代名詞だ」

「違うよ、坂本、アホの代名詞だって」

「肯定するな、バカ雄二！それと朔夜バカもアホも変わらないからね！」

私は笑いながらアキくんをみていた

「あの、それってどういうものなんですか？」

みーちゃんが首を傾げて問いかけてきた

「それはね、教師の雑用係ってところかな？」

「具体的には力仕事とかそういった類の雑用を、特例として物に触れるようになった試験召喚獣でこなすんだ」

本来の召喚獣は物に触れることはできない、いわば幽霊みたいなものなのだが、観察処分者の召喚獣は特例ってわけ

「そうなんですか？それって凄いですね。試験召喚獣って見た目と違って力持ちって聞きましたから、そんなことができるなら便利ですよね」

みーちゃんが目をキラキラとしてアキくんをみているがアキくんは

苦笑い

「そんな大したもんじゃないんだよ」

「そうだよみーちゃん、所詮はバカのバカの代名詞だしね」

「うんうん、そういうこと　　って朔夜、さらっと酷いこといわないですよ！」

えっ、事實は事実じゃん」と笑う私にアキくんはむう・・・とふてくされた

観察処分者の召喚獣は物に触れらぶんデメリットも当然ある、まず、召喚獣は教師の監視下でなければ呼び出すことはできないこと、召喚獣の負担は何割かがフィールドバックするということなんだ。

フィールドバックするらしい、フィールドバックとは召喚獣の疲労はアキくんは何割かの疲労をもたらし、召喚獣が受けた痛みはアキくんは何割か帰って来るというものである。

・・・ていうか、どうやったらそんなことが可能なのかすごい気になるんだよね・・・

『おいおい、”観察処分者”ってことは、試召戦争で召喚獣がやられると本人も苦しいってことだろ?』

『だよな。それならおいそれと召喚できないヤツが一人いるってことになるよな』

さすがに気づくよな、そう、戦争なんてアキくんは痛い思いするだけなんだけど

「アキくんなら大丈夫でしょ」

「気にするな。どうせ、いてもいなくても同じような雑魚だ」

「雄二に朔夜、そこは僕をフォロースする台詞を言うべきところだよ

ね？」

えっ？なんで私がアキくんのことをフォローしないといけないんだよ

「とにかくだ。俺達の力の証明として。まずはDクラスを征服してみようと思う」

「うわ、すごい大胆に無視された！」

あれ？坂本のことだからいきなりAクラスに勝負を挑むと思ってただけだな・・・

「皆、この境遇は大いに不満だろう？」

『当然だ！！』

「ならば全員筆を執れ！出陣の準備だ！」

『おおーっ！！』

「俺達に必要なのは卓袱台ではない！Aクラスのシステムディスクだ！」

『うおおーっ！！』

「お、お・・・」

クラスの雰囲気には圧されたのか、みーちゃんは小さく拳を作り掲げていた・・・やっぱり可愛いな・・・

「明久にはDクラスへんp宣戦布告の使者になってもらう。無事大役を果たせ！」

「・・・下位勢力の宣戦布告の使者ってたいてい酷い目に遭うよね？」

まあ、普通は酷い目に遭うよね、だって下位勢力からの宣戦布告な

んて邪魔でしかないしね

「大丈夫だ。やつらがお前に危害を加えることはない。騙されたと思っ
て行ってみろ」

「本当に？」

「もちろんだ。俺を誰だと思っている」

真顔で嘘をつくこのクラスの設備並みにひどい代表さんじゃないか
な・・・

「大丈夫、俺を信じろ。俺は友人を騙すような真似はしない」

「わかったよ。それなら使者は僕がやるよ」

「ああ、頼んだぞ」

普通にその友人とやらを騙してるんですけど！？

騙されているとも知らずにクラスメイトの歓声と拍手で送り出され
たアキくん、使者らしく毅然とした態度でDクラスに向かっていく。
・・・大丈夫かな？ちよつと心配になってきた

数分後

「騙されたあつ！」

すこしの時間がたってから教室に転がり込んで来るアキくんの姿が
あつた、制服こんなにもボロボロだった？

「やはりそうきたか」

「あつ、やっぱり分かかってわざと行かせたんだ」

「やはりつてなんだよ！やっぱろり使者への暴行は予想通りだったんじゃないか！朔夜も分かかってたんなら教えてよ！」

えっ？何で教えなきゃいけないの？教えないほうが面白そうだったじゃん

「当然だ。そんなことも予想できないで代表が務まるか」

「当然でしょ、てか、坂本の言葉で騙される頭が悪いと思うよ」
「少しは悪びれるよ！」

今思ったけど。アキくと坂本って友達って呼べるのかな？

「吉井君、大丈夫ですか？」

「あつ、そうだそうだ、アキくん大丈夫？」

みーちゃんと私はそういういながらアキくん近づいていった

「あ、うん。大丈夫ほとんどかすり傷　てか、朔夜が教えてくれればこんな傷負わなかったんだけど？」

「ん？そういえばそっか、ごめんごめん、今度から極力教えてあげるよ」

嘘だけどね

「吉井、本当に大丈夫？」

「平気だよ。心配してくれてありがとう」

「そう、良かった……。ウチが殴る余地はまだあるんだ……」
「ああっ！もうダメ！死にそう！」

島田さん……。それは流石にひどいと私は思うよ……

「そんなことはどうでもいい。それより今からミーティングを行うぞ」

「坂本、どうでもいいの!？」

「ああ、大丈夫だ。なにせ明久だからな」

「あつ、うん。そうだよな」

「どんな理由だよバカ雄二!それも朔夜は納得しないで!」

この教室で話すのではなく屋上で話すらしくさつき坂本が呼んだメ
ンバー+島田さんでミーティングを行うらしく坂本はクラスの扉を
開けて屋上へと向かい始めたので私たちはその後を追っていった

屋上にて

「明久。宣戦布告はしてきたな?」

「まあ、してきてなくてももう一回アキくんが行ってくればいいこ
とだしね」

「もう嫌だよあんな場所!一応今日の午後に開戦予定と告げて来た
けど」

「それじゃ、先にお昼つてことね?」

「そうなるな。明久、今日の昼ぐらいはまともな物を食べるよ?」

今日の昼ぐらい……は……?

「ば……バカ雄二!朔夜の前でなんてことをいつてくれるのさ!」

ふん……私の前でねっ……、そういつこと……

「ねえ、知ってるアキくん？」

「な、なにをかな？」

「私の携帯のアドレス帳に玲さんって名前があるんだけど」

「はっ、ははっ、だ・・・誰かなその人」

「今ここで電話して」「ごめんんさい！それだけは勘弁を」・・・じ

やあ、ここで私に昨日の食事をいつてごらん？」

「え、えつとあ・・・水と塩と砂糖・・・かな」

「理由は？」

「今月はゲームとマンガがいっぱい　　って朔夜！？誰に電話し

ようとしてるの！？」

ちっ・・・バレちゃったか、今のうちに玲さんに電話しようと思っ
たのに

「いやっ、玲さんに近況報告を・・・」

「や、やめてよ朔夜！約束と違うじゃん！」

約束？なにそれ？おいしいの？

と、アキくんこんな会話を繰り返していると皆の視線がこちらを
向いていた

「なんかお前ら夫婦みたいだな」

「さくやちゃん・・・まさか吉井君と」

「・・・妬ましいほど羨ましい」

「あんた吉井とどんな関係なの？」

ただの幼馴染だと思っんですけど・・・、てか、みーちゃんは私の
好きな人を分かってていつてるのかな！？

「本当じゃ、まさに夫婦じゃのう」

「ひ、秀吉くん！こんなのただの幼馴染だから」

「朔夜・・・こんなのはひどいよ」

アキくんがこんなものって呼ばれたためか泣きそうになってたけど今はそんなの関係ない！

「・・・あの、良かったら私がお弁当作ってきましようか？」

「えっ？」

「み、みーちゃん、お弁当はいいよ私がやるから！てか、私にやらせてください！」

「えっ、で・・・でも」

「良いの、私作りたいの、私がお弁当作ってくるから！」

「は、はい。さくやちゃんがそこまで言うのなら」

しづしづとみーちゃんは引いてくれた。

みーちゃんにお弁当なんか作られたら皆の命が危なすぎるからね

「・・・ふ〜ん。関根さんって随分優しいんだね。吉井だけに作ってくるなんて」

じつと私のことを睨んでくる島田さん・・・、私は皆の命を救ってあげたのに！

「はあ・・・、分かったよ、みんなの分も作ってくれば良いんですよ」

「わあ、朔夜の手作りなんて何年ぶりだろう」

「俺たちにもか？・・・まさか毒を盛るきか！？」

「みんなの分で毒なんか盛らないよ！坂本だけにだったら分らないけど」

毒と言ったらみーちゃんの料理のほうだよね・・・いや、あれはどちらかというと化学兵器並だよ

「それは楽しみじやのう」

「・・・・・・・・（コクコク）」

「・・・・・・・・お手並み拝見ね」

「さくやちゃんってお料理できたんですね」

失敬な、私はアキくんよりも料理がうまいんだからねっ！

そういえば、秀吉くんにも食べてもらえるんだよ、いつも以上にはりきって作らなきゃ

「さて、話がかなり逸れたな。試召戦争に戻ろう」

「雄二。一つ気になっていたんじやが、どうしてDクラスなんじや？段階を踏んでいくならEクラスじやろうし、勝負に出るならAクラスじやろう？」

「あつ、私もそう思った、坂本のことだからすぐにAクラスに戦争を起こすのかと思ったよ」

「そういえば、確かにそうですね」

「まあな。当然考えがあつてのことだ」

まあ、考えがなかったら殴つてたところだけどね

「どんな考えですか？」

「色々理由があるんだが、とりあえずEクラスを攻めない理由は簡単だ。戦うまでもない相手だからな」

「え？でも、僕らよりクラスが上だよ？」

「ま、振り分け試験の時点では確かに向こうが強かったかもしれない。けど、実際のところは違う。オマエの周りにはメンツを良く

「見てみる」

「えーっと・・・」

そりゃ私とみーちゃんはAクラス並みの点数だからね、Eクラスなんて余裕だよ

「美少女が三人と馬鹿が二人とムツツリが一人いるね」

「誰が美少女だと!？」

「ええ!？雄二が美少女に反応するの!？」

「・・・(ポツ)」

「ムツツリにまで!？」

「私はアキくんと言われるほどバカじゃないよ!」

「朔夜まで!？どうしよう、僕だけじゃツツコミ切れない!」

「まあまあ。落ち着くのじゃ、代表にムツツリに関根」

うつ、秀吉くんに止められたらやめるけど、止めてなければ殴ってたよ・・・

「そ、そうだな」

「そうだね、秀吉くんが言うなら」

「秀吉が言わなかったらどうなってたんだろう僕」

頭が良くなるほど殴られてたんじゃないかな

「ま、要するにだ姫路に朔夜が問題がない今、正面からやり合ってもEクラスには勝てる。Aクラスが目標である以上はEクラスなんかと戦っても意味が無いってことだ」

「?それならDクラスとは正面からぶつかると厳しいの?」

「ああ。確実に勝てるとは言えないな」

「だったら最初から目標Aクラスに挑もうよ」

「まあ、坂本にも色々とき言いかけた作戦としてDクラスに勝つ必要があるんだよね？」
「まあ、そういうことだ」

廊下で言っていた勝つための作戦のことだよ

「あ、あのー！」

「ん？どうした姫路」

「さくやちゃんが言った、さっき言いかけた……って吉井君と坂本君とさくやちゃんは前から試召戦争について話し合ってたんですか？」

「ああ、それか。それはついさっき、姫路の為に明久に相談されて」

「それはそうとー！」

アキくんの照れ隠しなのか坂本の声がかき消されるほどの大声を發した

「さっきの話、Dクラスに勝てなかったら意味無いよ」

「お前ら俺に協力してくれれば勝てる。いいか、お前ら。ウチのクラスは 最強だ」

根拠も無い坂本の言葉だったけど、その言葉で皆に火がついた

「いいわね。面白そうじゃない！」

「そうじゃな。Aクラスの連中を引きずり落としてやるかのう」

「……………(グッ)」

「が、頑張りますっ」

「私もできるだけ頑張ってみるかな」

打倒Aクラス、FクラスがAクラスを倒すという下克上が今ここから始まる・・・みたいなの

第五問（後書き）

いやあ、ながかったなあ

久しぶりの更新ということですが、いグダグダ（苦笑）

本当は昨日更新するはずだったんだけど誤ってEscボタンを押して書いてたのが全部パーになってしまいまして（泣）

今日書くはずだった分もまとめて書きちゃいました

朔夜たちは打倒Aクラスを倒すことができるのか！？

感想&amp;ご意見お待ちしております

第六問（前書き）

見てくれてる人がいるのかどうか不安な亜花寝子ですw

第六問

〈試召戦争Fクラス対Dクラス〉

「ちくしょー！なんで私がテストを受けないといけないんだよ！」

「そりゃ、私たちの点数は0点ですし」

「つべこべ言わずに早くテストを受けるよ」

そう、私とみーちゃんは戦争が始まった瞬間テストを受けていた

試召戦争前、クラスにて

「そういえば坂本、私とみーちゃんは点数がないんだけどどうすればいいの？」

「えっ？なんで朔夜と姫路さんには点数がないの？」

「バカか明久。俺たちの点数は最後に受けたテストの点数・・・すなわち振り分け試験のときの点数になるんだ」

「そういうこと 私は名前を書き忘れて0点で」

「私は途中退席なので0点なんです」

そう、不運にもAクラス確実だったのに0点でFクラスに入ってしまったのですから

「まあ、点数の補充は戦争が始まってからやってもらう」

「ちなみに坂本、私は最初から本気をだしたほうがいいのかね？」

みーちゃんはAクラス並の実力者ってみんなに知られてるから最初から本気だろうけど、私は最初のテストでしか高得点をたたき出してないからあまり有名ではないからね

「ああ、そうだな。Dクラス並の点数、一教科110点くらいを目安に補充してもらえると助かる」

「余裕だね、約10分程度で終わらせて寝かせてもらおうか」

「10分で終わるのか！？ていうか、終わったらすぐに前線に行けなっ、すこしの休息もないの!？」

「この、悪魔、悪鬼羅刹、変態！」

「いいたい放題だなおいっ！」

仕方ないな・・・15分くらいで終わらせるようにしてすぐに前線に行つてあげるか

↳ 試召戦争Fクラス対Dクラス

「さて、約110点取るの終わったっつと」

私は鉛筆を投げ出し卓袱台に突っ伏した

「って、もう110点ですか・・・、早いですね、本当に10分ですか」

「まさか本当に一教科10分でやるとわ」

「あはは、まあ、一教科くらい10分のできるよ。けど何教科も

受けたからさすがに疲れたよ」

「そりゃすごい早さでしたもんね」

「途中から腕の動く速度がおかしかったぞ」

「はぁ・・・、みーちゃんも頑張ってるね、じゃあ、私は前線に行ってくるよ」

「はい。いつてらっしゃい」

「おいっ！俺を華麗に無視だな！」

「私はテストを受けすぎて幻聴が聞こえてるようだよ・・・、みーちゃん以外に声が聞こえる」

「俺がしゃべってるからだろ！」

あれ、幻聴かと思ったたら坂本だった、まったくわからなかったよー

（棒読み

私はみーちゃんに手を振りながらクラスを出た、ついでに出る前に坂本のすねを蹴ったけど

さて、のんびりのんびり前線に向かうとしようかな

「い、嫌あつ！補習室は嫌あつ！」

と、そこで聞き覚えのある声が聞こえてきた・・・島田さんかな？急いで駆けつけてみると島田さんが縦ロールの女の子に手を引かれていた・・・、その先には保健室？

「ふふつ。お姉さま、この時間ならベッドは空いてますからね」

・・・へっ？

「よ、吉井、早くフォローを！なんだか今のウチは補習室行きより危険な状況にいる気がするの！」

うん、だろうね。私から見てもそう思うよ

「殺します……。美春とお姉さまの邪魔をする人は、全員殺します……。」

「島田さん、君のことは忘れない！」

「まったく、普通助けるよね……。Fクラス関根が召喚を行います試獣召喚サモン」

『Fクラス	関根朔夜	V S	Dクラス	清水美春
科学	118点	V S	41点	』

魔方陣が描かれトンファーをもった私の召喚獣が飛び出す……。つて武器はトンファーか、まあ接近戦は得意だけど

「ごめんね、縦ロールの子」

いつきに縦ロールの子の召喚獣との距離を詰め、トンファーで殴りつけた

「島田さん、大丈夫だった？」

「ええ、助かったわ。ありがとう関根さん、補習の鉄じ 西

村先生、早くこの危険人物を補習室へお願いします」

「おお、清水か。たっぴりと勉強漬けにしてやるぞ。こっちに来い」

戦死するとあの鉄人先生の補習室行きになるのがルールだ、絶対行きたくないと思っ！死なない程度にがんばろう！

「そうだ、関根さんはやめて欲しいな、朔夜って呼んでよ」
「わかったわ朔夜、ウチのことも気軽に美波って呼んで頂戴」
「わかったよ美波ちゃん」

美波ちゃんと仲良くなれたのはいいんだけど・・・アキくん・・・

「吉井」「アキくん」

「島田さんに朔夜、お疲れ。とりあえず島田さんは一度戻って化学のテストを受けてくるといいよ」

「吉井」「アキくん」

「さ、須川君、行こう。戦争はまだまだこれからだ」

「吉井いつ!」「アキくん!」

「は、はいっ」

「・・・美波ちゃん（ウチ）を見捨てた（わ）よね？」

「・・・記憶にございません」

「・・・」

「・・・」

しばしの沈黙。アキくんがそこまでバカだったなんて・・・私はがっかりだよ・・・。

「美波ちゃん、アキくんの処分はまかせて　まずは化学の点数を補充してきなよ」

「ありがとう朔夜、そうするわ」

私は美波ちゃんに手を振ると、アキくんの方に振り返った

「・・・なにか言い残すことわ？」

「・・・本当にすみませんでした」

第六問（後書き）

勉強しなきゃ・・・

ご意見、ご感想お待ちしております

第七問（前書き）

学校を休んでしまったので続きを・・・

第七問

「わかったアキくん！ちゃんと助けなきゃいけないんだからね！」
「・・・はい。本当にごめんなさい」

説教を開始してから10分くらいたつかな、まあ、アキくんも反省してるしもうこころへんでやめてあげようかな

「もう今度はきちんと助けてあげるんだよ？」

「うん。わかったよ」

「さて、戦争に戻りますか、今は一体どんな状況なのアキくん」

アキくんは中堅部隊長だからね、秀吉君とかが点数を補給してる間はここを通すわけにはいかないんだよね

「吉井隊長！横溝がやられた！これで布施先生側は残り二人だ！」

「五十嵐先生側の通路だが、現在俺一人しかいない！援護を頼む！」

「藤堂の召喚獣がやられそうだ！助けてやってくれ！」

私が思ってた以上に劣勢みたいだ

「布施先生側の人たちは召喚獣を防御に専念させて！五十嵐先生側の方は総合科目の人と交代しながら効率良く勝負をするように！藤堂君は・・・朔夜頼めるかな？」

「ふ〜ん、アキくん、部隊長らしくてかっこいいじゃん。いいよ、藤堂君は私が助けにいつてあげるよ」

『了解！』

『関根さん、藤堂君はこっちだ』

藤堂君を助けに私は戦場へと出向いた、アキくん本当に部隊長らしく的確な指示をだしてたなあ……。

「藤堂君、助けに来てあげたよ」

「おっ、関根か、すまない。」

「二年Fクラス関根朔夜、召喚します。試獣^{サモン}召喚」

『Dクラス 鈴木一郎 VS Fクラス 関根朔夜』

化学 92点 『 98点』

ああ、やっぱりさっきの戦いで少しは点数を削られちゃってたか、まあ、点数はほぼ互角だし勝てるでしょ

「Fクラスが俺の点数を超えてるだど!？」

「むっ……、ちょっとムカついた、とっとと片付けるよ!」

幸いで相手も近接武器なので距離を詰める、ていうか詰めないと当たらないもん……投げてみる?

「ていつ!」

『Dクラス 鈴木一郎 VS Fクラス 関根朔夜』

化学 戦闘不能 98点 『 』

どうしよう、トンファー投げたら当たっちゃった……、それも一

撃……。

「よし、さつさと連れてつてください、鉄じ　鉄人先生」

「関根、それは言い直してないじゃないか、まあ、戦死者は補習」

鈴木君は鉄人に担がれて補習室に連行されていった。南無三。

「さて、こんなに早く相手が倒れるとは思ってなかったからな、どうしようかなあ」

「ふう、まあ関根ありがとう、もう少しであの地獄の補習室に行くところだった」

「ん？別に大丈夫だよ。」

藤堂君にお礼され、藤堂君と一緒に中堅部隊がいるところに戻っているときスピーカーの雑音が聞こえてきた

《連絡致します》

あれ、この声は須川君……？

《船越先生、船越先生、吉井明久君が体育館裏で待っています》

ん？

《生徒と教師の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそうです》

えっ……と、アキくん？どういうこと？

私と藤堂君はよく意味がわからず、急いで中堅部隊がいる場所まで戻るとそこには

「須川あああああつっ！」

と、叫びながら血の涙を流したアキくんの姿があった

「アキくん、藤堂君助けてきたよ、それと・・・、アキくんって船越女史が好きだったんだね・・・」

「ご、誤解だよ、あれは作戦っていうか」

「さ・・・作戦か、よかった。」

みーちゃん良かったね、後で言つといてあげないと

「工藤信也、戦死！」

「西村雄一郎、総合残り40点です！」

「森川が戻つてこない！やられたのか！？」

さっきの放送でFクラスの士気が上がったらしい。

けど、残念ながら戦力差の影響が現れ始め、次々と悪い報告が聞こえてきた

「そろそろやばいんじゃないのアキくん？」

「そうだね、18人もいた部隊だったのに」

工藤君と森川君が戦死、せっかく助け出した藤堂くんも戦死してしまい

これで部隊は私含めて6人になってしまった

「明久に朔夜、あと少し持ちこたえろ！」

アキくんと撤退のことを考え始めたときにそんな檄が飛んできた。後ろには、援軍を率いた坂本がこちらに向かって走ってきた

「援軍だ！合流される前に吉井たちを全滅させる！面倒なことになるぞ！」

Dクラスの前線部隊長の塚本君の指示がこつちに聞こえてくるけど、マズい。坂本たち援軍はまだまだ遠い場所にいる、なるべくは全員補習行きを避けたいところだ

「西村雄一郎、戦死！」

これで残りは5人、ええい、仕方ない。私が戦死覚悟でみんなを守ってみせる

「ほら、みんな下がって！私が全員相手してあげるよ 試験召喚^{サモン}」

「朔夜だけじゃ勝てないよ。それに女の子一人を戦場で戦わせられない、Fクラス中堅部隊長吉井明久、試験召喚^{サモン}」

「それを美波ちゃんの時に言えばよかったのにさ」

「ごちゃごちゃ言っじやない、Fクラスのくせに勝てると思ってるのか？」

「そんなこといって負けたらかつこ悪いけど」

「先生、Dクラス笹島圭吾行きます！試験召喚^{サモン}」

『Dクラス 笹島圭吾 VS Fクラス 関根朔夜& a m

p・吉井明久

化学 99点 98点& a m p・9点

』

「・・・アキくん」

「正直悪かったと思ってるよ」

9点って・・・どうやったなら取れるのか教えて欲しいんだけど

「ま、まあ、朔夜がいればなんとか「頑張れアキくん」、私見てるから「やる気なし!」?」

「無視してんじゃねえよ!」

おっ、今笹島くと戦ってる最中だったっけ、アキくんの点数が悪すぎて忘れちゃってたよ

「よし、アキくん。まかせたよ」

「無理だって!この点数差みてよ、相手の10分の1しかないんだよ!」

仕方ないな・・・、また投げてみる?

「ていつ!」

片方のトンファアを手に取り、笹島くんの召喚獣に向かって投げつけたらサツとよけられた

「・・・って、よけられたよ!」

「普通よけられるよ朔夜・・・」

なっ、だってさっきの人普通に当たってたよ!?

「仕方ない、僕が体勢を崩すからその間に武器とってきてよ?」

「はいはい、了解であります」

アキくんは観察処分者のため、召喚獣のあつかいが慣れている、ていうか、さっきからすごい勢いでアキくんばかり攻撃されてるけ

ど、一発もあたってないや

「そんな大振りで当たると思わないで・・・よっ!」

アキくんの召喚獣が笹島くんの召喚獣の足に一発入れ、体勢を崩したその隙に私はトンファーを取りにいき笹島くんの召喚獣に一撃を入れた

『Dクラス 笹島圭吾 VS Fクラス 関根朔夜 & a m

p・吉井明久

化学 17点 98点 & a m p ; 9点

』

「ちえ、流石にとどめはさせなかつたみたい・・・」

「まあ、朔夜の一撃であそこまで減らせたんだからよかつたよ」

「おい、笹島一人じゃきついだらう、他のやつらは数人にまかせて俺も手伝うよ」

「ああ、頼むよ中野」

よく見ると私たち以外の人たちも戦っていた。みんな戦死しなければいいんだけど

中野くんの召喚獣が現れ、頭上に49点と表示されていた

「戦死者は補習!」

どんどん部隊の数が減っていく6人いたのも残り3人、そろそろやばい。

私は中野くんの召喚獣の攻撃をトンファーで受け止めながらそう思っている

「待たせたな、吉井に閔根！五十嵐先生！Fクラス近藤吉宗が行きます！試獣召喚サモーン」

そこへ援軍がようやく到着したようだ

「くっ！ここは退くぞ！全員遅れるな！」

敵の部隊長の塚本くんが撤退命令をだした、正直助かったよ

「深追いするなよ。俺たちも明久の部隊を回収したら一旦戻るぞ」

こっちはFクラスの代表さんか・・・

「ていうか、もっと早く援軍よこしてよね！」

「お前が俺のすねを蹴って行くから少し遅れたんだ」

「・・・ごめんなさい」

くっ、私が蹴らなければなんて理由を使われるとなにも言い返せない・・・

「とにかく立て直すぞ」

アキくんの部隊は一旦教室に戻り回復試験を受けることになった

教室に化学のテストを受け終わった後

「明久よくやった」

坂本がすっごく晴れやかな笑顔でアキくんにそう言っていた

坂本があそこまで褒めるなんて、それもアキくんを、どっぴう風の吹き回しだろう？

「校内放送、聞こえてた？」

「ああ。バツチリな」

ああ・・・、アキくんの不幸を喜んでるわけだ、納得

「雄二、須川君が何処にいるか知らない？」

「もうすぐ戻ってくるんじゃないか？」

「やれる、僕なら殺せる・・・！」

「殺っちゃだめだからねアキくん」

「とめるんじゃない朔夜、僕はやつを殺るしかないんだ」

あらら、これは本気で殺るのかあ

「ちなみに、だが、あの放送を指示したのは俺だ」

「シャアアアアッ！」

おっ、どこから包丁取り出したんだい？それも避けにくい致命傷になりやすいところを的確に狙っているね

「あ、船越先生」

坂本がそういった瞬間アキくんは目にも留まらぬ速さでロッカーの中に飛び込んだ

「さて、馬鹿は放っておいて、そろそろ決着をつけるか」

「そっじゃな。ちらほらと下校しておる生徒の姿も見え始めたし、頃合じゃろっ」

「……(コクコク)」

「おっしゃ！Dクラス代表の首級を獲りに行くぞ！」

『おうつ！』

「みんな、アキくんの心配はしないんだね」

教室から皆が出て行く、テストを受けた直後で動きたくないけど私も行くでしょう

「あー、明久」

坂本が教室を出る前にアキくんを呼んだ

「船越先生が来たっていうのは嘘だ」

こう告げながら坂本が引きいるメンバーは外に出て行った
さて、私も戦場に向こうかな

アキくんがロッカーからでてからすごい勢いで坂本を殺しにいったのは気のせいだね

他のクラスが下校を始めたため、教師が捕まりやすいくいたるところで戦いが始まっていた

「坂本、塚本くん私がもらっていいよね」

「ん？ああ、できるのであれば別にかまわない」

代表を討ち取るのはみーちゃんの役目だから私は塚本くん*で我慢*しなきゃ……

「じゃあ、塚本くん。私サモンがその首をもらうよ 試獣召喚」

「そう簡単に負けるかよ！試獣召喚」

塚本さんの点数は107点と表示された、私の点数は・・・

「な、Fクラスでその点数だと!」

152点と表示されてた、しまった、とりすぎちゃったかな・・・
まあ、いいか

「ふふつ ばいばい」

塚本さんの召喚獣をトンファーで一気に殴りつけた

「Dクラスの塚本さん、討ち取った!」

大きな声でそう報告すると、士気が一気に上がり始めた
さて、みーちゃんが平賀くんだったけ? Dクラスの代表を討ち取るの
を見に行こうかな

「ちくしょう!あと一歩でDクラスを僕の手で落とせるのに!」

「何を言うかと思えば、彼氏くん。いくら防御が薄く見えても、さ
すがにFクラスの間人間が近づいたら近衛部隊が来るに決まってい
るだろう?ま、近衛部隊がいなくてもお前じゃ無理だろうけど」

ていうか、Fクラスの扱って酷いんだな・・・

というか、平賀さんの対応は私でもムカつく!

「それは同感。確かに僕には無理だろうね。だから 姫路さん、

よろしくね」

「は?」

『何をいつてるんだ、この馬鹿は?』といった顔をしている。

そっか、みーちゃんがFクラスだってことはしるはずがないもんね

「あ、あの……」

「え?あ、姫路さん。どうしたの?Aクラスはこの廊下は通らなかつたと思っけど」

「いえ、そうじゃなくて……」

「みーちゃん、ファイト」

「あつ、さくやちゃん……、頑張ります。Fクラスの姫路瑞樹です。えつと、よろしくお願いします」

「あ、こちらこそ」

おつ、平賀くんが戸惑ってるかな?そりゃAクラス確実の子がFクラスにいるんだもんね

「その……Dクラス平賀君に現代国語勝負を申し込みます」

「……はあ。どうも」

「あの、えつと……さ、サモン試験召喚です」

『Fクラス	姫路瑞樹	VS	Dクラス	平賀源二
現代国語	339点		129点	』

おつ、流石みーちゃんだね、300点超えかあ

「え?あ、あれ?」

「じ、ごめんなさいっ」

その大剣に似合わず素早い動きで相手を切りつけた、平賀くんの反撃も許さず、一撃でDクラスの代表を下し、この戦争は決着がついた

第七問（後書き）

ようやくロケラスとの戦争終了ですね・・・
ご意見や感想をお待ちしております

エピソード0（前書き）

Dクラスとの試召戦争編が終わったので一息といふかなんといふかで朔夜が昔修羅と呼ばれる前のお話を書きたいと思います

エピソード0

これは私・・・関根朔夜が昔、修羅と呼ばれる前の3年生くらいのときの話である。

「わ・・・私の筆箱・・・」

そう、私は昔から明るい子ではなく、おとなしく、口数の少ない子供だった

「筆箱？ああ、これのことか？」

「きたねえー筆箱だな、こんなのごみと同じだよな」

「そうか、なら捨てちまおうぜ」

「や・・・やめて、返して」

私は抵抗するけど「うるせー！」と蹴られ殴られる毎日であった
私は次第に学校に行くのがいやになっていた

私がいじめられる原因、それは、私の能力・・・絶対記憶能力のせいである。

絶対記憶能力、一度覚えたことは忘れない、忘れたと思ったことは忘れることができるという便利な能力だ
だが、私はその能力のせいでいじめにあっていた。

父親はこの能力を誇らしげに思ってるらしく、親戚や近所、会社の同僚など至るところで私の能力の自慢をしている。娘がその能力のせいでいじめにあってるとも知らずに……。

えっ？母親？お母さんは……とうの昔に亡くなってるの、そういえばお母さんが亡くなってからかな……私の能力が開花し始めたのわ

その日も私はいじめられていた、ただ、今日はいつもとは違った

「や、やめてよ、それは大事な……大事なお母さんの形見……」
「お母さんの形見だってよ、こんなものを学校にしてくるからいけないんだよ！」

その日は、お母さんの命日だった、命日だったからか私はその日、お母さんの形見の首飾りをして学校に言ったのが運の尽きだったのかもしれない……いや、首飾りをしていったからこそ

私から首飾りを奪い取った子はあることかその首飾りを踏みつけようとしていた、もう駄目だと涙がこぼれだしたとき、急にクラスの扉が開いた

「なにやってるの！関根さんが泣いてるじゃないか！」

そこに入ってきたのはこのクラスのムードメイカーだった吉井明久くんだった

吉井君……、アキくんは私の首飾りを奪い返し、いじめてる子たち

「なんでいじめるの!? 関根さんがなにかやったの!?」

「うるせえ! あいつの能力が気に入らないんだよ!」

「能力なんか関係ない! 関根さんは関根さんだ! 能力がうらやましいからってやっていいことと悪いことがある!」

初めてだった、初めて私を能力で判断しない、初めて私をかばってくれた、初めて私は私だなんて言われた
その言葉を聞いた瞬間さつきとは違う理由で涙が溢れ出してきた

「・・・まれ」

「はっ? お前何いつてるんだ?」

「関根さんに謝れ!」

「ふざけてんじゃねえよ!」

アキくんはいじめっ子に殴られた、それでもアキくんは

「関根さんに謝れ!」

「うるせえな!」

「や、もうやめてよ!」

アキくんは殴られても殴られても立ち上がり同じ言葉を繰り返した、結局いじめっ子が気味悪がって帰ってしまうまでアキくんは同じ言葉を繰り返していったのだ

「え、えつと・・・吉井君? だ、大丈夫・・・? すごい傷・・・」

私が今にも泣き出しそうな顔を見るとアキくんはこっちを見てニッと笑った顔を見せ

「大丈夫だよ、関根さん」

口を切り、服などもぼろぼろになったアキくんがそう言ってきた。
・
どう見ても大丈夫じゃなく、今にも倒れそうなアキくんの姿を見て私は強くならなきゃいけない……。もう二度とアキくんがこんな姿をしないように……と

それから私は空手、合気道、総合格闘技などいろいろな分野を習い、おとなしく、口数の少なかったのが嘘のように変わり、今みたいな明るい性格にまでなった。

それもこれもアキくんがいなかったら今の私がないことだ、だからアキくんには感謝を仕切れないほど感謝している、私たちはその日以来良く遊ぶようになり、次第にいじめはなくなっていくた

そして今現在

「朔夜、どうしての？そんなものふけた顔をして？」

「いやあ、アキくんが私のことを助けてくれた日のことを思い出してね」

「ふん、そっか」

「そういえば、アキくん、クッキー焼いてきたけど食べる？」

「わい、食べる食べる、朔夜が焼くクッキーおいしいんだよね」

「そりゃどうも」

アキくんがおいしそうにクッキーを頬張る姿を見て私はクスツと笑った

「アキくん、おいしい?」

「うん、とってもおいしいよ」

その笑顔は助けてくれた日の笑顔に良く似ていた……

「つて、私考えてみるといっぱい助けられてるんだなあ」

「ん? どういうこと?」

「いやあ、アキくんにも助けられたし、秀吉くんにも……ねっ」

「秀吉にも助けてもらったことがあるの? いついつ、どんな風に?」

「それはね……おっしえな〜い」

「なんだよそれー、待て朔夜、正直に話すんだ」

い〜や〜といいながら私はアキくんから逃げてゆく、それを追いかかるアキくん

クッキーでも置いとけばアキくんはつられるはず!

逆方向の道にクッキーを置いていくとみごと罠にはまり、違う道を進んでいった……つて単純すぎる

「秀吉くん、アキくん……、私は絶対忘れないよ、助けてもらった日のことは」

少し赤みのかかった夕暮れに誰にも聞こえないようにそっすぶぶやいた

エピソード（後書き）

さてさて、グダグダだな（苦笑）

↑意見&amp;amp;感想お待ちしております

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2801x/>

バカと少女と召喚獣

2011年10月21日03時00分発行